跡見学園女子大学文学部紀要　第57号　2022

The Fixed Period を読む

―アンソニー・トロロープが描いた「1980年」―

The Fixed Period: Anthony Trollope's "1980"

香山　はるの

KAYAMA Haruno

要　旨

『定められた期限』（*The Fixed Period,* 1882）は、アンソニー・トロロープの唯一の未来小説である。この小説はこれまで「トロロープらしくない作品」として、高く評価されなかったが、近年注目する批評家も出てきた。たとえば、物語に描かれている「安楽死」のテーマは今日の社会においても意義深い問題である。トロロープはこの小説を執筆した時65歳であった。安楽死のテーマを選んだ背景には、彼自身の健康に関する不安や、老いや死に対する意識があったと思われる。

トロロープは作家として常にチャレンジし続けた。この晩年の作品においてもこれまで殆ど採用しなかった一人称の語りを試みている。「定められた期限」の法を信奉し、高齢者の「強制的安楽死」を唱えるネヴァーベンドの語りは、彼の秘められた野心や傲慢さを露呈する。しかし、その一方でトロロープはこの頑迷な「改革者」の感情の揺れを鮮やかに描き、読者の反応を和らげている。

物語の舞台は「ブリタニュラ」というニュージーランドの近くの架空の島である。かつてはイギリスの支配下にあったが、30年前に国として独立を果たした。トロロープは、ネヴァーベンドが提唱する「定められた期限」を是認することはなかったが、それを阻止したイギリス側の「正義」に対しても無批判ではなかった。その根底にあるのは、母国イギリスの植民地支配や領土拡大に対するトロロープの疑念である。小説の後半では、巨大な軍艦に象徴されるイギリスの武力による介入や、ブリタニュラを「救出」して再統治するイギリス側の偽善が鋭く示唆されている。

The Fixed Period（『定められた期限』1882年）は、アンソニー・トロロープ（1815–82）の最晩年の小説の一つである。多くの批評家が指摘するように、安楽死という深刻なテーマを扱ったこの小説は、いわゆる「パストラル」世界を描いた「バーセットシャー年代記」（"The Chronicles of Barsetshire"）に代表されるトロロープの多くの小説とは作風が異なる。この小説はこれまで「最もトロロープらしくない本」（Pollard, 165）と見なされ、批評家に取り上げられることが少なかったが、近年静かな注

目を集めている。2012年には小説家のデイヴィッド・ロッジ（David Lodge）が、作品に描かれた「老い」や「安楽死」のテーマを高齢化が進む今日の社会に関わる問題として「ガーディアン」紙（*The Guardian*）で論じたことは記憶に新しい。[1] また、ドミニック・アレッジオ（Dominic Alessio）のように「ユートピア小説」という観点からこの小説を分析している批評家もいる。[2] さらに、ヘレン・ルーシー・ブライス（Helen Lucy Blythe）は、物語の舞台であるニュージーランド付近の架空の島、ブリタニュラ（Britannula）とイギリスの関係に焦点を当て、ポストコロニアル的観点からこの作品を論じている。[3] このように、この小説は現代においても興味深い様々な問題を内包している。本稿では、*The Fixed Period* においてトロロープが行ったいくつかの試みに注目しながら、彼が描いた100年後の世界を分析し、この作品の意義についてあらためて考察したい。

The Fixed Period は、1979年から1980年のブリタニュラを舞台にしたトロロープの唯一の「未来小説」である。ブリタニュラはかつてイギリスの支配下にあったが、30年前ニュージーランドから移り住んだ「エリート」たちの成功によって経済的繁栄を遂げ、国として独立を果たした。この島の社会制度はイギリスを模したものが多いが、異なっている点は死刑制度がないこと、そして「定められた期限」という独自の法律が制定されていることである。後者は安楽死に関する法律で、人々は67歳になったら「共同墓地」（“Necropolis”）と呼ばれる施設に入所し、68歳を迎える前にそこで「安楽死」を施されるという内容である。このため、生まれてくる子供は、背中に出生日を入れ墨で刻印される。R. H.スーパー（R. H. Super）らの批評家は、この小説の執筆に関してトロロープがサミュエル・バトラー（Samuel Butler）の『エレホン』（*Erewhon,* 1872）やエドワード・ブルワー＝リットン（Edward Bulwer–Lytton）の『来たるべき種族』（*The Coming Race,* 1871）等の未来小説に影響を受けた可能性を示唆している（Editor’s Preface, v–vi）。「定められた期限」は、高齢者が老いによる身体的、精神的苦痛から解放され、計画的に威厳ある死を迎えるべきであるという理念に基づいている。また、それに伴い、若者の介護の負担の軽減や国全体の経済的利益も期待できるという。ただし、高齢者が比較的少ないブリタニュラではまだこの法律が施行されたことはない。物語は「定められた期限」を信奉する大統領、ジョン・ネヴァーベンド（John Neverbend）の親友、ゲイブリエル・クラスウェラー（Gabriel Crasweller）が67歳になり、「共同墓地」の入所を拒むところから始まる。そして、クラスウェラーの娘、エヴァ（Eva）をはじめ、「定められた期限」の実施に反対する者が次々に現われる。

トロロープが安楽死というテーマを選んだ背景には、自身の老いに対する意識があったに違いない。ジョン・サザーランド（John Sutherland）が述べているように60歳を過ぎてからトロロープは身体の不調に悩まされていた。片方の耳は聞こえなくなり、視力は低下し、そのほか肥満、腱鞘炎、ヘルニアなどいくつもの問題を抱えていた。また、1881年には胸の痛みを覚え、狭心症と診断された（181）。しかし、リチャード・マレン（Richard Mullen）が示唆する通り、トロロープはネヴァーベンドが情熱を傾ける「安楽死」を決して肯定していたわけではない（638）。老いの不安を感じながらも、それ

を払拭するかのように精力的に創作活動を続けた彼の姿勢がそれを物語っている。1876年に親類のシシリア・ミートカーク（Cecilia Meetkerke）に宛てた手紙の中でトロロープは、世間は自分のような年代の人をまるで蝋燭差しに残った半インチの蝋燭のように言うが、自分としてはその最後の半インチの蝋燭を「燃え上がらせたい」気分だと書いている（*Letters* II, 702）。実際トロロープは晩年においても作家として新しい試みに挑戦し続けた。たとえば、*The Fixed Period* は、『ニーナ・バラトカ』（*Nina Balatka,* 1866）や『リンダ・トレッセル』（*Linda Tressel,* 1868） と同様、当初匿名で発表された。[4] 死後に出版された『自伝』（*An Autobiography,* 1883）にも記されているが、匿名出版は作家として名声を確立したトロロープが読者の反応や自分の能力を再確認するためのいわば「実験」であった（129）。

さらに興味深い点は、トロロープがこの小説で短編以外では採用したことのない一人称の語りを採用したことである。たとえばトロロープは、親しくしていたアメリカ人女性、ケイト・フィールド（Kate Field）に宛てた1868年５月４日付けの手紙の中で彼女の小説を批評し、一人称の語りは「エゴイスティック」で、読者の反発を引き起こすため、避けるべきだと忠告している（*Letters* II, 429）。しかし、*The Fixed Period* においてトロロープはあえて一人称の語り手を使い、大きな効果を生み出している。トロロープは人の感情に重きを置かず、法で人の生死をコントロールするシステムに批判の目を向ける。そして、「文明の発達」のために「定められた期限」の施行に情熱を傾けるネヴァーベンドを鋭く風刺しているのである。

ロバート・トレイシー（Robert Tracy）が論じているように、トロロープは社会を改善しようという情熱に燃えた改革者が抽象的な理論に固執して、独善に陥る姿をしばしば風刺している（287）。『養老院長』（*The Warden,* 1855）のジョン・ボールド（John Bold）と同様、*The Fixed Period* のネヴァーベンド（Neverbend）も名前が示す通り、そうした頑迷な改革者である。ネヴァーベンドに関して言えば、トロロープは彼を物語の「主人公兼信頼できない語り手」とすることで皮肉の効果を最大限に高めている。特に小説の前半におけるネヴァーベンドの語りは、彼の秘められた野心や傲慢さを露呈する。すなわち、ネヴァーベンドが「定められた期限」の素晴らしさを主張すればするほど、読者は目的を達成するためには人の感情を犠牲にしかねない彼の冷徹さや、法の制定者として後世に名を残したいという利己的な欲望を確信するのである。たとえば、小説の第１章で、ネヴァーベンドが安楽死の実施が国家にもたらす経済的利益を計算する場面は衝撃的である。また、彼の友人のクラスウェラーは極めて健康で、仕事に励み、人生を大いに楽しんでいる。そのため、強制的に彼に安楽死を施すのはあまりに残酷であると多くの者は感じている。しかし、ネヴァーベンドは「定められた期限」は人類の未来に資するものだと確信し、それを「監禁」や「殺人」、「死刑執行」と結びつけて捉える人々の態度に激怒する。そして、時代に先んじていたがために苦難の道を歩んだ英雄たちと自身を重ね合わせることで慰めを得るのである。「それは、偉大な改革者である私が耐えねばならない困難の一つであった……けれども、私はまたコロンブスやガリレオのことを思い出し、このまま突き進むか

命を落とすか、どちらかだと心に誓った」(84)。[5] ネヴァーベンドの周囲の者はこのような彼の誇大妄想を見抜いている。たとえば、妻のサラ（Sarah）は寝室で彼に懇々と説教をする。「ネヴァーベンド様―あなたは物笑いの種になりますよ。妻として言わなければならないの。ほかの人は皆思うでしょうよ、自分をガリレオにたとえるなんて一体どんな人なんだろうってね」(105)。

しかし、一方でネヴァーベンドが全くの悪人として描かれていないことは重要である。[6] たとえば彼の家族や国に対する愛情は真実である。５章ではブリタニュラとイギリスのチームが対戦するクリケットの試合が描かれているが、普段は冷静沈着なネヴァーベンドが息子のジャック（Jack）の活躍に興奮し、我を忘れて帽子を投げる場面は微笑ましい。また、特に小説の後半でトロロープはネヴァーベンドの独善性を暴きながらも、彼の心の葛藤や揺れ動く気持ちを巧みに描き、読者の彼に対する反発を和らげている。たとえば、父親の「安楽死」を何としても阻止しようとするエヴァ・クラスウェラーに、「定められた期限」に執着するのは実は国のためではなく、自分の「プライド」や「虚栄心」のためではないかと責められた時、ネヴァーベンドは動揺を覚える。

> 実際そうではないと言い切れるのだろうか？　私は公共の利益のためにやっているのだといい気になっていた。しかし、私が「定められた期限」に固執するのはコロンブスやガリレオと肩を並べたい気持ちがあったからではないのか？　或いは、もしそうでないとしたら、人類に恩恵を施した人間として有名になりたいという私的な気持ちはなかったのだろうか？（111）

物語が進むにつれ、ネヴァーベンドは時折こうした疑念を吐露する。事実８章では、イギリスの介入によってクラスウェラーの「共同墓地」行きが阻止された時、ネヴァーベンドは親友の命が助かったことに対してひそかな安堵を覚える。ネヴァーベンドが「定められた期限」に対する信念を捨てることはない。しかし、彼が心の内をさらけ出して人間的な弱さを見せる姿に読者は共感を抱くのである。

トロロープは特に1860年代後半以降の作品において、人間の心理に対する深い洞察を示している。たとえば、『バーセット最後の年代記』（*The Last Chronicle of Barset,* 1867）のジョサイア・クローリー（Josiah Crawley）や『彼は自分が正しいと知っていた』（*He Knew He Was Right,* 1869）のルイス・トレヴェリアン（Louis Trevelyan）など、一つの考えに取り憑かれて孤立する人間の内面世界をトロロープは鮮やかに捉えた。ネヴァーベンドもまた執着心の強さという点でこれらのキャラクターと共通している。しかし、たとえば「変わり者」のクローリーが周囲に受け入れられ、最終的にバーセットのコミュニティーへ回帰するのに対し、ネヴァーベンドには孤独な未来しか残されていない。愛する妻や息子も彼の「定められた期限」に対する思いを理解しない。　皮肉にもネヴァーベンドを全面的に支持したのは、彼が嫌悪する強欲なエイブラハム・グランドル（Abraham Grundle）のみである。結局イギリスが送り込んできた砲艦を前にして、ネヴァーベンドの野望は潰える。彼はブリタニュラの首相の座を奪われ、「危険人物」としてイギリスに護送される身となる。さらに、彼を深く傷つけ

たのはブリタニュラが再びイギリスの直轄植民地になったことである。「私が追い求めていた夢はすべて一瞬にして粉々に砕け散った。私はブリタニュラ共和国を破滅させ、かつての君主、イギリスに再び統治される原因を作った人物として名を残すのみである」(172)。ジョン・ブライト号の船上で手記を書きながら、ネヴァーベンドは、「定められた期限」の施行には時間を要するが、理念自体は間違っていないと考える。しかし、やがて辛い現実と向き合う時が来る。彼は、イギリスの船員たちが「定められた期限」を「ニュージーランドのカニバリズム」(174) になぞらえ、自分を残虐極まりない殺人鬼のように見ていることを知り、暗澹たる気持ちになるのである。

> そのとき初めて、自分はイギリスでは全く必要とされていないという考えが頭に浮かんだ……イギリスで私は誰にも必要とされないし、誰にも気にかけてもらえない。友人も全くなく、ひとりきりなのだ。おそらく私は牢獄に入れられて、ブリタニュラの人々のもとへ戻らないように監禁されるのではないか。(180–81)

トロロープはこの場面で、ネヴァーベンドに対する読者の哀れみを引き出している。この先ネヴァーベンドは社会から「隔離」され、孤独と無力感に苛まれながら生きることになるであろう。それはまさに彼が考案した「共同墓地」に入れられ、「安楽死」が施されるのを待つ人々がたどる運命なのである (Blythe, 176)。このように、ネヴァーベンドの描写にはアイロニーとペーソスが微妙に織り交ざっている。トロロープは「定められた期限」に固執するネヴァーベンドの尊大な野心を風刺する一方、彼の挫折と孤独を痛ましく描くことによって、陰影に富む興味深いキャラクターを創造しているのである。

スキルトンが指摘するように、実際この小説において一貫した風刺の目的を見つけることは難しい (41)。トロロープはしばしばネヴァーベンドを風刺するが、その一方で彼の主張のある部分は支持したり、さらには、ネヴァーベンドと対立するイギリスをも風刺しているからである (42–44)。このことが作品を一層複雑にしている。

たとえば、ネヴァーベンドが設立した「共同墓地」には、安楽死を施された人々の遺体を焼却する火葬炉が備わっている。6 章では、施設の管理を任されているグレイボディ (Graybody) が「死体の匂い」や「煙突から立ち上る煙」を想像して、「火葬」に対する強い恐れを口にするが、これは当時の多くのイギリス人の反応と推測される。[7]『ヴィクトリア朝の人々と老年』(*The Victorians and Old Age*) の中で、カレン・チェイス (Karen Chase) が記しているように、1874年にヴィクトリア女王の侍医、ヘンリー・トムソン卿 (Sir Henry Thompson) が、「死後の遺体処理」("The Treatment of the Body after Death") など火葬に関する 2 つの論文を「現代批評」(*Contemporary Review*) に発表してセンセーションを巻き起こした (103)。トムソン卿は、遺体の腐敗や悪臭の発生の防止など主に保健衛生上の観点から火葬の効用を訴えたが、これに対して、教会関係者や「タイムズ」(*The Times*)

紙などから激しい反発の声が上がった（Chase, 103–105）。しかし、その一方で少数ではあるが賛同する者も現われた。1874年１月13日にはトムソン卿の家に16人の支持者が集まり、「イギリス火葬協会」（“The Cremation of Society”）を発足させた。トロロープもその一人である。このほか、画家のJ. E. ミレー（J. E. Millais）やジョン・テニエル（John Tenniel）、外科医のT. スペンサー・ウェルズ（T. Spencer Wells）らが発起人として名を連ねた（*Letters* I, 409）。スキルトンは、トロロープが火葬を支持した背景として、ヴィクトリア朝の人々の死に対する感傷的な態度や仰々しい葬儀等を彼が嫌悪していた点を指摘している（46）。実際小説の中でも、火葬に関する人々の無知や因習的な感情が描写されている。たとえば、上述のグレイボディが見せる素朴な反応はやや滑稽である（「男と女では焼いた時の匂いがちょっと違うらしいですね」[87]）。また、７章で火葬に反対する理由を聞かれたイギリス人のパドルブレーン（Puddlebrane）は、「自分の家族は代々土葬だった」としか答えられない（96）。ネヴァーベンドは、人々が偏見をなくし、火葬の利点を理性的に受けとめられる日が来ることを期待しているが、その点についてはトロロープも同様の考えであったろう。

また、トロロープの皮肉がしばしばイギリスやイギリス人にも向けられていることも注目に値する。クリケットの試合をするためにブリタニュラにやってきたイギリス人の中には、外見ばかり気にする浅薄なケニントン・オーヴァル卿（Sir Kennington Oval）のような貴族の青年がいる。試合の初日の描写（５章）では、ウィケットを守るケニントン卿は巨大なヘルメットをつけた「ミネルヴァ」（“Minerva” 69）にたとえられ、その重装備が揶揄されている。[8] さらに、この後に起こるイギリスによる軍事的介入とブリタニュラの再併合は明らかに批判的に描かれている。クラスウェラーが「共同墓地」に収監される日、イギリスの巨大な砲艦、ジョン・ブライト号が、ブリタニュラの首都、グラッドストノポリス（Gladstonopolis）の港に姿を現す。船には250トンの「蒸気回転銃」（“steam–swiveller gun”）が搭載されており、ブリタニュラが「定められた期限」の法を廃止しなければ、街を一瞬で壊滅させるという。ネヴァーベンドにはもはや屈服する以外の選択肢はない。イギリスではブリタニュラの「定められた期限」を危険視する声が高まったため、政府はこの法の撤廃を求める決議をした。そして、「慈善大臣」（“the Minister of Benevolence”）を務めるケニントン卿の叔父の計らいで海兵隊員50人と兵士100人を乗せた軍艦がブリタニュラに送りこまれたのである。ちなみにトロロープは、小説の中で「慈善」（“benevolence”）という言葉を皮肉をこめて繰り返し使っている。たとえば、11章でクラスウェラーがネヴァーベンドと別れる際、「定められた期限」について、「君の慈善の残忍さ」（“the barbarity of your benevolence” 164）と評しているのは意義深い。実際この物語では、「残忍」と「慈善」はしばしば紙一重であることが示唆されている。タウン・ホールで行った最後のスピーチで、ネヴァーベンドは、イギリスは「定められた期限」を「残忍極まりない」（“so barbarous” 174）法だと批判するが、果たしてイギリスの軍事介入は「慈善」だと言えるのか問い返している。そして、破壊や殺戮を正当化して領土拡張を推し進めるイギリスを激しく非難する。ヘレン・ブライスが示唆しているように、この場面で読者は「人類の未来」のために高齢者に安楽死を施そうとしたネヴァー

ベンドは、「正義」のために破壊や暴力も辞さないイギリス兵士よりも「残忍」であると言えるのか疑問を抱くのである（162）。

以上見てきたように、小説の前半ではネヴァーベンドに対する風刺が顕著であったが、物語が進むにつれ、トロロープは彼に対する読者の感情を和らげると同時に「慈善」と「残忍」、「正義」と「悪」といった境界を崩していく。

さらに、大統領の座を追われたネヴァーベンドに代わり、「総督」としてブリタニュラを治めることになったイギリス人、ファーディナンド・ブラウン卿（Sir Ferdinand Brown）が非常に不愉快な人物として描かれている点も重要である（Skilton, 44）。ファーディナンド卿はケニントン卿と同様、体面にこだわる深みのない人物である。10章では彼がブリタニュラの人々に向けて演説をする場面が描かれているが、一分の隙もない服装で現われたファーディナンド卿は、ラテン語の引用や声のトーン、間の取り方、ジェスチャーに至るまで入念に準備してきた様子である。そして話しながら自分の声に陶酔している。しかし、肝心の演説の内容は、美辞麗句を並べたきわめて皮相的なもので、「人々の記憶にほとんど残らない」（141）。さらに、注目すべきは、彼の言葉の端々に鼻持ちならない傲慢さが見え隠れすることである。たとえば、ネヴァーベンドが、イギリスの武力による威嚇を批判すると、ファーディナンド卿は「世界中で起こる争いを見ても……最高の敬意は最高の軍隊に払われるのが世の習いというものでしょう」（133）と言い放つ。また、ファーディナンド卿が「中央アフリカに住むぶ厚い唇の人たち」（145）という侮蔑的な発言をしていることも看過できない。彼がイギリスとその影響下にある「英語圏」の地域を世界の中心と考え、それ以外の地域を見下しているのは明白である。「繁栄、知性、文明において、英語圏であなた方ブリタニュラにまさるところはない。そして英語圏にないのなら、一体どこにあるというのでしょう？」（142）。

このような描写の根底には、トロロープの帝国主義に対する疑問が認められる。伝記作家のヴィクトリア・グレンディニング（Victoria Glendinning）は、トロロープは「帝国主義者」ではなかったと述べている（「アンソニーは帝国主義には賛同せず、ディズレーリが嫌いだった」[382]。「アンソニーは同時代の多くの人とは異なり、反帝国主義の立場から逸脱することはなかった」[252]）。***The Fixed Period*** に関して言えば、小説の舞台、ブリタニュラがニュージーランドの近くの島と設定されていることに注目したい。[9] トロロープは1870年代に二度オーストラリアとニュージーランドを旅している。主な目的は、1865年にニュー・サウス・ウェールズに移住した次男のフレッド（Frederic James Anthony Trollope 1847–1910）を訪れることであったが、旅の見聞を記して旅行作家としてのキャリアを追求したいという思いもあった。その成果は旅行記『オーストラリアとニュージーランド』（***Australia and New Zealand,*** 1873）と「リヴァプール・マーキュリー」紙（***The Liverpool Mercury***）に掲載した20通の手紙にまとめられている。[10] トロロープは、オーストラリアやニュージーランドについて、イギリスの労働者階級の若者が移住するのに望ましい地と捉える一方、いずれはアメリカと同様、イギリスから独立していくことを想定していた。

植民地の国としての繁栄がイギリスに従属することで推進される限り、イギリスは道徳的にも政治的にもその従属関係を維持しなければならない。一方、植民地がそうした関係に執着し続けるより、そこから離れることでよりうまくやっていける時が来たら、イギリスは彼らを手放すべきだと思う。(*Australia and New Zealand* I, 353)

キャサリン・ホール（Catherine Hall）も書いているように、トロロープは概して帝国の領土拡大には懐疑的であり、特にオーストラリアやニュージーランドについては、イギリスは成長した子供が巣立っていくのを温かく見守るべきだと考えていた（190–91）。このような視点から見ると、*The Fixed Period* におけるイギリスのブリタニュラへの軍事的介入をトロロープは「正当化」しているという J. H. デイヴィッドソン（J. H. Davidson）の主張は疑わしい（328）。むしろ、9章でブリタニュラ共和国の消滅を知ったネヴァーベンドが思わず漏らす言葉の中に、トロロープの未来に対する懸念が見いだせるのではないか。「今や、20世紀の終わりに、不当な権力がこれほどまでに行使され得るのだろうか？」（132）。

また、R. H.スーパー（R. H. Super）らの批評家が、ファーディナンド・ブラウン卿のキャラクターは、南アフリカの高等弁務官であったヘンリー・バートル・フレア卿（Sir Henry Bartle Edward Frere 1814–1884）をモデルにしていると指摘している点も興味深い（"The Chronicler," 415）。フレア卿は、南アフリカの連邦化をめざして、1879年にズールー王国に侵攻した。1877年に南アフリカを旅したトロロープはフレア卿と面識があり、個人的には尊敬の気持ちも抱いていたようである（Glendinning, 454. Terry, 212）。しかし、ズールー戦争を引き起こしたという点についてはフレア卿を厳しく非難した。たとえば、オーストラリアの友人、ジョージ・ウィリアム・ラスデン（George William Rusden）[11] に送った1879年9月9日付けの手紙の中で、トロロープはフレア卿がズールー王国の王セテワヨ（Cetywayo）に出した「最後通牒」は「この上なく傲慢な独裁統治の見本」であると述べている（*Letters* II, 842）。また、ラスデンに宛てた別の手紙でも、トロロープはイギリスの武力行使がおびただしい数のズールー人の犠牲者を出したことに触れ、「文明は狂乱に陥った！」と述べて怒りを露わにしている（*Letters* II, 826）。『南アフリカ』（*South Africa,* 1878）にも記している通り、トロロープはズールー人に対して大変好意的であった（「私はナタールのズールー人が心から好きだった」[I：320]、「彼らが今後勤勉で教養のある人々になる見込みは十分あると思う」[I：324]）。[12] この旅行記に19世紀の白人のイギリス人の世界観が反映されていることは否定できない。しかし、トロロープが先住民の存在を尊重し、母国の武力による支配拡大に対して疑問を抱いていたことは確かである。

以上論じてきたように、トロロープが描いた「1980年」は今日においても意義深い問題を提示している。たとえば、国が人間の生死を管理する強制的安楽死のシステムである。*The Fixed Period* では、67歳以上の高齢者は人々から「敬意」をもって「共同墓地」へと送りだされることになっている。サミュエル・バトラーの未来小説『エレホン』では、病気になった者は重労働を課せられ、終身刑を宣

告される。ブリタニュラの老人は、『エレホン』のように「罰せられる」わけではないが、弱者が排除されるという点で二つの世界は共通している。これは前述のロッジの指摘にもあったように、まさに現代の高齢化社会が直面する問題である。その他、「火葬」の実現や、携帯電話の前身とも思われる「ヘアー・テレホン」(“hair telephone”)、クリケットの試合で起用される「スチーム・ボウラー」(“steam-bowler”)、15分間で6マイル走る「蒸気自転車」(“steam-bicycle”)、さらには、一瞬で街を破壊する強大な殺傷力を備えた兵器の出現など、トロロープが予見した100年後の世界は実に興味深い。

しかし、この未来小説はジョージ・オーウェル(George Orwell)の『1984年』(*Nineteen Eighty-Four,* 1949)のような小説とは作風が異なる。第一に、ネヴァーベンドの計画は阻まれ、彼が構想した社会は実現しなかった。第二に、この作品は完全な風刺小説にはなっていない。小説の前半でトロロープは、痛烈な皮肉を込めてネヴァーベンドを描いた。しかし、物語が進むにつれ、ネヴァーベンドの迷いや苦悩などいわば彼の人間的な弱さに焦点を当てることで、読者の共感や憐憫を喚起している。また、トロロープの風刺の対象が一貫していないことも次第に明らかになる。イギリス軍の介入によって「定められた期限」は廃止された。しかし、それに伴ってブリタニュラが国としての独立を失ってしまったことは重要である。こうした苦みの残る結末には、自国の帝国主義に対するトロロープのアンビヴァレントな姿勢が大きく関わっている。結局読者はイギリスに再併合されたブリタニュラにも、また、ネヴァーベンドが護送されるイギリスにも理想の地を見いだすことはできないのである。

このように、物語には1980年の世界に対するトロロープの不安が見え隠れする。しかし、その一方で、一人称の語りや安楽死のテーマなどには、晩年のトロロープの新たな挑戦や執筆に対する意欲が表れている。ヘンリー・ジェームズ(Henry James 1843-1916)は「トロロープについてはいつも安全だった。新しい実験など決してしなかったのだから」(100)と書いているが、これは必ずしも真実ではない。しかし、同時にこの作品は小説家トロロープの大きな関心が、一貫してキャラクターにあったことをあらためて示している。[13] ロバート・トレイシーも示唆しているように、トロロープの究極の目的は、安楽死の是非を問うことよりも、むしろそれを熱狂的に支持する改革者を描き出すことにあったと思われる(292)。トロロープは、主人公のネヴァーベンドに物語を語らせることで皮肉の効果を高めるとともに、彼の微妙な心の揺れや葛藤を捉え、単なる風刺を超えた人間味のあるキャラクターを創り上げた。

「定められた期限」では、人は67歳になると施設に送られ、一年以内に死を迎えることになっているが、奇しくもトロロープはこの小説が出版された数ヶ月後に亡くなった。67歳であった。

注

1．David Lodge, “Rereading Anthony Trollope.” *The Guardian* 14 December 2012. Web. 15 August 2021. <https://www.theguardian.com/books/2012/dec/14/david- lodge-rereading anthony-trollope>.

2．Dominic Alessio, “A Conservative Utopia? Anthony Trollope’s *The Fixed Period* (1882), ” pp.73-94.

3．Helen Lucy Blythe, “Barbarous Benevolence : Anthony Trollope’s *The Fixed Period* (1882) and *Australia and New Zealand.* ” *The Victorian Colonial Romance with the Antipodes.* pp.159-194.

4．*The Fixed Period* は1881年の10月から1882年３月まで 「ブラックウッズ・マガジン」（*Blackwood’s Magazine*）に匿名で掲載された。R. C. Terry, *Oxford Reader’s Companion to Anthony Trollope,* p.202.

5．Anthony Trollope, *The Fixed Period* (Oxford UP, 1991)．以下 *The Fixed Period* からの引用はこの Oxford’s World’s Classics 版による。

6．トロロープは「完全な善人や悪人」は不自然だと考え、そういうキャラクターは殆ど描かなかった。これは『養老院長』（*The Warden*）の15章でディケンズの描くキャラクターが揶揄されていることにも示唆されている。

7．この小説が執筆された1880-81年のイギリスでは、火葬は法的に認められていなかった。イギリスで火葬が合法化されるのは1884年である。David Skilton, “*The Fixed Period* : Anthony Trollope’s Novel of 1980,” p.46.

8．ネヴァーベンドが「ワーテルローの戦い」（75）にもたとえるこの試合で、重装備のイギリス選手に対し、ブリタニュラの選手が身体を防護するものを何も身につけていないのは暗示的である。Graham Handley, Introduction, p.x.

9．たとえば、ヘレン・ブライスは「強制的安楽死」の対象であるブリタニュラの高齢者を、絶滅の危機に瀕したニュージーランドのマオリ族と重ね合せて捉えている。Blythe, *The Victorian Colonial Romance with the Antipodes,* p.161.

10．この20通の手紙は、後にブラッドフォード・アレン・ブース（Bradford Allen Booth）の編集で *The Tireless Traveler : Twenty Letters to the Liverpool Mercury by Anthony Trollope 1875* にまとめられ、出版された。

11．ラスデン（1819-1903）はイギリスに生まれ、16歳のときオーストラリアに移住した。ヴィクトリアの植民地省に勤務し、著述活動も行った。トロロープは1871年にオーストラリアを訪問した際ラスデンと知り合い、意気投合して生涯にわたる友情を育んだ。ニコラス・バーンズ（Nicholas Birns）とジョン・F. ヴィレニウス（John F. Wirenius）によれば、ラスデンは人種に関して当時としては非常にリベラルな考えを持っていたという。*Anthony Trollope : A Companion,* pp.178-179.

12．デボラ・ディーネンホルツ・モース（Deborah Denenholz Morse）によれば、1877年の南アフリカ訪問はトロロープが人種や帝国の問題についてあらためて考える転機となった。*Reforming Trollope : Race, Gender, and Englishness in the Novels of Anthony Trollope,* p.136。

13．トロロープは、『自伝』（*An Autobiography*）の中で、小説家の「人間性についての知識」の重要性について繰り返し説いている。p. 152.

引用文献

Alessio, Dominic. “A Conservative Utopia? Anthony Trollope’s *The Fixed Period* (1882),” *Journal of New Zealand Literature* 22 (2004) : 73–94.

Birns, Nicholas and John F. Wirenius. *Anthony Trollope : A Companion.* Ed. Laurence W. Mazzeno and Sue Norton. Jefferson, North Carolina : McFarland & Company, 2021.

Blythe, Helen Lucy. *The Victorian Colonial Romance with the Antipodes.* New York : Palgrave Macmillan, 2014.

Chase, Karen. *The Victorians and Old Age.* Oxford : Oxford UP, 2009.

Davidson, J. H. “Anthony Trollope and the Colonies.” *Victorian Studies* 12.3 (1969) : 305–330.

Glendinning, Victoria. *Trollope.* London : Pimlico, 1992.

Hall, Catherine. “Going a–Trolloping : imperial man travels the Empire.” *Gender and Imperialism.* Ed. Clare Midgley. Manchester : Manchester UP, 1998. 180–199.

Handley, Graham. Introduction. *The Fixed Period.* By Anthony Trollope. London : The Trollope Society, 1997. vii–xiv.

James, Henry. *Partial Portraits.* New York : Haskell House, 1968.

Lodge, David. “Rereading Anthony Trollope.” *The Guardian* 14 December 2012. Web. 15 August 2021. <https://www.theguardian.com/books/2012/dec/14/david–lodge–rereading anthony–trollope>.

Morse, Deborah Denenholz. *Reforming Trollope : Race, Gender, and Englishness in the Novels of Anthony Trollope.* Farnham : Ashgate, 2013.

Mullen, Richard. *Anthony Trollope : A Victorian in his World.* London : Duckworth, 1990.

Pollard, Arthur. *Anthony Trollope.* London : Routledge & K. Paul, 1978.

Skilton, David. “*The Fixed Period* : Anthony Trollope’s Novel of 1980.” *Studies in the Literary Imagination.* 6.2 (Fall, 1973) : 39–50.

Super, R. H. *The Chronicler of Barsetshire : A Life of Anthony Trollope.* Ann Arbor : U of Michigan Press, 1990.

_____. Editor’s Preface. *The Fixed Period.* By Anthony Trollope. Ann Arbor : U of Michigan Press, 1990. v–xv.

Sutherland, John. *The Secret Trollope : Anthony Trollope Uncovered.* Brighton : Edward Everett Root, 2019.

Terry, R. C. *Oxford Reader’s Companion to Anthony Trollope.* Oxford : Oxford UP, 1991.

Tracy, Robert. *Trollope’s Later Novels.* Berkeley : U of California P, 1978.

Trollope, Anthony. *Australia and New Zealand.* Vol. I. London : The Trollope Society, 2002.

_____. *An Autobiography and Other Writings.* Oxford : Oxford UP, 2016.

_____. *The Fixed Period.* Oxford : Oxford UP, 1991.

_____. *The Letters of Anthony Trollope.* 2 vols. Ed. N. John Hall. Stanford, California : Stanford UP, 1983.

_____. *South Africa.* Vol. I. London : The Trollope Society, 2001.